



きくちきく「ともだちのいろ」 2021年 ©きくちき

館長のつれづれコレクション案内

「永遠」への祈りから生まれるかたち



深沢幸雄(1924-2017)

「不死鳥出現」

1983年 紙・メゾタイントほか 74.9×50.0cm

今年の干支は乙巳(きのとみ)。乙は草木がしなやかに伸び、横に広がる意味を持ち、巳年は脱皮を繰り返して成長する蛇にちなんで、不老不死、再生の年とされるそうです。美術家の中には大きな困難や挫折を経つつ、制作を続けた方々がいます。「不死鳥出現」の作者深沢幸雄もそのひとりです。

市原に長く住んだ房総ゆかりの作家でもある深沢幸雄は、1924年に山梨で生まれ、朝鮮総督府の官吏であった父の仕事のため、生後すぐに朝鮮半島に渡り、小中学校を同地で過ごしました。画家を志しながら、父親の意見を入れて東京美術学校彫金科に入学。1945年3月10日の東京大空襲で逃げる際に右ひざを打撲し、翌月に応召しますが、8月の終戦で除隊して東京美術学校に復学します。1949年に同校を卒業して立川市の中学校の美術教師となり、翌年、市原市に移住して市原高等学校で教鞭を取りながら油彩画制作を続けました。ところが1951年3月に、戦中に受けた打撲症がもとで右ひざ関節炎となり、以後6年間歩行困難となります。53年の自由美術家協会展に「からたちと裸像」(200号)、54年の同展に「車と裸像」(300号)で入選しますが、不自由な足では大画面の油彩画制作が難しいことから、独学で小画面の銅版画制作に取り組み、自己の内面を掘り下げ、抽象的なかたちを緻密な版画技法で表した作品で1950年代末に評価を得ました。1963年にメキシコに渡り、マヤ文明やアステカ文明の壮大な遺跡に深く感動し、それまでの内省的で繊細なモノクロームの作風から、豊かな色彩を用いた力強い生命力あふれる作風へと変化を遂げました。

深沢は不死鳥を幾度もモチーフとしており、「僕は永遠を信じたく、また人間の不変の向上のリズムを信じたく、それは祈りに近いと云っていいのであるが、これは今時まったく古風だと苦笑する。時々顔を出すこの堕天使も、これ又同様時々ヌッと姿を現わす不死鳥もこの古風な思想の産物であろうかと思う。堕ちてはならぬ。永劫に死してはならぬと云う古風な祈願がこれらの作品をうみ出すので

ある」と述べています(註)。6年間の歩行困難の中で、油彩画が無理なら版画へ、と制作への情熱を絶やさない深沢の心には、常に不死鳥への祈願があったのでしょうか。不死鳥は時が来ると自ら火に飛び込み、灰の中から復活するとされますが、深沢はこの作品のように卵から再び生まれる不死鳥を複数描いています。セピア、淡紅色、青を重ねて、巣の中で卵を割って顔をのぞかせる幼鳥と浮遊する成鳥のイメージを浮かび上がらせ、幾度も繰り返される再生を思わせます。頭部の華やかな飾り羽と流麗な曲線による体躯が印象的な不死鳥のかたちは、どこかユーモラスでもあります。闇の中で割れた卵の上部が強い光を受けて白く輝き、複数の光源から不思議な光が射し込んでシュールな雰囲気を醸し出しています。

弊館は今年開館30周年を迎えます。美術館設立を望む多くの方々の期待を受けて、1982年に千葉市新総合基本計画に美術館設置準備を進めることが記載され、1989年7月に千葉市教育委員会文化課が「(仮称)千葉市立美術館の設置について(案)」に市民センター(旧川崎銀行)用地を美術館敷地とすることを提案して、旧川崎銀行を保存しつつ建設された複合ビルの中に弊館が開館したのが1995年11月でした。

今年は30周年記念として、これまでの歩みを振り返るとともに、次の30年への展開の芽を育む年とするべく、様々な企画を準備しています。そのひとつが、美術館開館前からの千葉の美術を跡づける展覧会「千葉美術散歩」。深沢作品も複数展示される予定です。困難にあっても、永遠を信じ、人の不変の向上を信じ、祈った深沢の作品に力を得て、乙巳の今年が、これからも再生を繰り返しながら発展していく美術館の30周年記念にふさわしい年となればと思います。

〔館長 山梨絵美子〕

〔註〕三木多聞「深沢幸雄の世界」(『深沢幸雄展』図録 山梨県立美術館 1991年)

世界の絵本パレード

ブラチスラバからやってきた!



日本からの出品作品の絵本(一部)

担当学芸員インタビュー

春の千葉市美術館では、「ブラチスラバからやってきた!世界の絵本パレード」を開催します。ブラチスラバ世界絵本原画展(BIB)の出品作品を国内で紹介する今回の展覧会について、担当学芸員に聞きました。[話し手:学芸員 庄子真汀、山下彩華]

——はじめに、ブラチスラバ世界絵本原画展(以下、BIB)とはどういった展覧会なのか、教えてください。

山下 二年に一回、スロバキア共和国の首都ブラチスラバで行われる、世界最大規模の絵本原画コンクールです。世界から集められた絵本原画が一堂に展示されます。そしてその中から、10名の国際審査員の審査によって、グランプリ、金のりんご賞、金牌といった賞がイラストレーターに贈られます。

庄子 Biennial of Illustrations Bratislavaなので、略してBIB。1965年にできたコンクールで、50年以上の歴史があります。設立当時は国によって用紙の質や印刷技術にかなり差があったことから、イラストレーションを審査対象にし、その芸術性を評価するという軸がつけられました。

——日本ではBIBを紹介する巡回展が長年開催されてきました。千葉市美術館では2005年に初めて開催し、今回で20年目、10回目の開催になります。

庄子 今回はタイトルを思い切って変えました。これまでは「ブラチスラバ世界絵本原画展」というタイトルを冠してきたので、これは大きな改新だと思っています。

山下 BIBを長年みてくれている人にも、初めて知る人にも、親しみがわくタイトルにしたかったのです。

庄子 ブラチスラバから絵本が連なってやってくる!というイメージ。現地の展覧会の華やかさや盛り上がりがより伝わるように考えました。

山下 デジタル技術による作品も増えてきて、「何を原画とするのか」という問いに改めて立ちかかったことも、変更理由の一つです。

——今回の展覧会はどういった構成になっているのでしょうか。

山下 今回は二部構成です。第1部では、世界各国の受賞作品をすべて集め、一堂に紹介します。受賞作品の中には、その作家の豊かなイマジネーションがあらわれている作品や、民族的な表現・色彩が評価された作品、あとは目には見えない繊細な心の内を視覚化し、絵本の表現として成立させたことが評価されたような作品が見られました。そこで、現地取材や審査員評に基づきながら浮かび上がってきた「IMAGINATION」、「IDENTITY」、「INNER JOURNY」という三つのキーワードを通して、その魅力に迫ります。

庄子 そして第2部は、日本からの出品作家全10組を特集します。出品作家全員に取材するのは今回が初めての試みです。

山下 作家ひとりひとりとコミュニケーションをとりながら、出品作を軸にその作家の創作活動をより深く紹介したいと思いました。BIBへの出品作品だけでなく、関連作品や資料によって、それぞれの作家が何を考え、どのように制作に向き合っているのかが見えてくるのではないかと思います。

——それでは、どのような作品を展示予定なのでしょう。

庄子 取材でお聞きした内容と併せ、今回の出品作が生まれる背景がわかるような展示にしたいと考えました。私が取材に行ったザ・キャビンカンパニーさん[図1]には、原画のほか、追加出品として、ラフ画や習作を貸していただいています。それから、きくちきさんは本番を何回もやる、下書きの工程がない作家さんです。



[図3] ダニ・トゥレン《一等車の旅》(金のりんご賞) 2018-2020年 ©Dani Torren



[図2] きくちき『きくちきとともだちのいろ』に登場する動物の陶作品 2021年 ©きくちき

そのため、非常に多くの習作があり、それをお借りしました。あとは、きくちさんが絵本に関連して作っていらっしゃる陶芸作品も、多数展示予定です[図2]。

——今回並ぶのは原画だけではないということですか?

庄子 そうです。原画だけではないんです。各作家のインタビューテキストや追加出品作品を通して、絵本が生まれるまでの過程やそこに懸ける思いを知れることが、大きな見どころです。

山下 例えば、スケッチブックや絵本以外の制作物など。スペインの作家であるダニ・トゥレンさん[図3]からは、原画として完成する前のイラストレーションをお借りしました。日本では初公開のものなので、見応えがあると思います。

——ほかにもおすすめしたいところはあるですか?

山下 本展では、世界で注目を集めるイラストレーションの数々を見ることができるので、世界のイラストレーションの「いま」を体感できる機会になるかと思います。多様な絵本イラストレーションの表現を楽しんでいただけたら嬉しいです。

庄子 二部構成にした理由も、日本を際立たせたいというわけではありません。日本も世界の数多くの国の中の一つであると意識することで、世界の中の日本も見えてくるし、日本と世界を比べることもできると思います。幅広い表現があるけれ

ども、日本の作品もその一つであると。私たちにとっては慣れ親しんできたものですが、国際コンクールという場において、他の国の人からすれば新鮮に見えるものでもあるので、そういった対比が面白いと思っています。

山下 それに今回、日本人作家の中にはBIB初出品の方が数名いらっしゃいました[図4]。「BIB」というつながりの中で、どういった作品や作家に出会えるのかが毎回の楽しみでもあります。当然ながら作家によってテーマの選び方や表現方法は多様で、イラストレーションは「絵本」を構成する様々な要素のうちの一つではあるのですが、実際に目にすると、原画が持つパワーってとても大きいと思いますね。

庄子 現地の審査では原画を評価するし、この国内巡回展においても原画などを展示物としてお見せしますが、もっと「絵本」という媒体そのものであったり、作家の制作というプロセスの部分であったり、広く「絵本」というものを紹介したいなと思っています。もちろん、絵本に馴染みのある方はどなたでも楽しんでいただける展示だと思います。一方で、絵本に馴染みがありすぎて、イラストレーションに着目して作品を鑑賞することが新鮮に思える方もいると思うんですね。そういった方にも、ぜひ気軽に来ていただきたいです。絵本を読んで育ってきた方がたくさんいらっしゃると思いますから。

——最後にお伝えしたいことは

山下 千葉市美術館の開館30周年を記念した、当館とBIBのあゆみをふりかえる特集展示も行います。歴代受賞作の絵本を展示しながら、長らく当館で巡回展を開催してきた歴史を振り返ります。

庄子 そうすると、また絵本の「いま」が際立ちますね。ぜひ両方ともご覧いただきたいと思います。

※「ブラチスラバからやってきた!世界の絵本パレード」展は、喜多方市美術館(2024/10/12-11/17)、千葉市美術館(2025/3/22-5/18)、足利市立美術館(2025/5/24-7/2)、うらわ美術館(2025/7/12-8/31)、横須賀美術館(2025/9/13-11/3)、砺波市美術館(2025/11/15-2026/1/12)をまわる全国巡回展です。



[図1] ザ・キャビンカンパニー《がっこうにまにあわない》 2022年 ©ザ・キャビンカンパニー



[図4] 桃山鈴子さんの初めての絵本が日本代表作品に選出。桃山鈴子《へんしんすがたをかえるイモムシ》 2021年 ©桃山鈴子

ブラチスラバからやってきた!世界の絵本パレード

会期 2025年3月22日[土] - 5月18日[日]

会場 8・7階企画展示室

休室日 4月7日[月]、14日[月]、

21日[月]、28日[月]、

5月7日[水]、12日[月]

詳細はホームページよりご覧ください



美術館の仕事を紹介します！

その
18

展覧会に向けた調査～スロバキア編～

「ブラチスラバ世界絵本原画展（通称 BIB）」の国内巡回展の開催にあたっては、現地調査が必要不可欠。学芸員が現地へ赴き、その足と目で調査をおこないます。今回は、「ブラチスラバからやってきた！世界の絵本パレード」のために2023年10月におこなった、スロバキアの首都ブラチスラバでの現地調査のようすをレポートします。

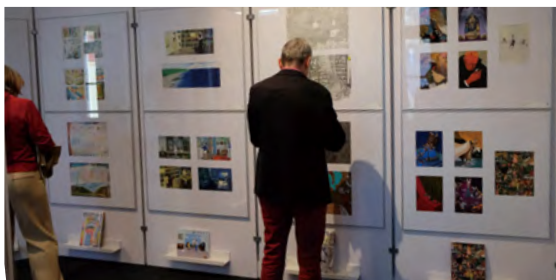
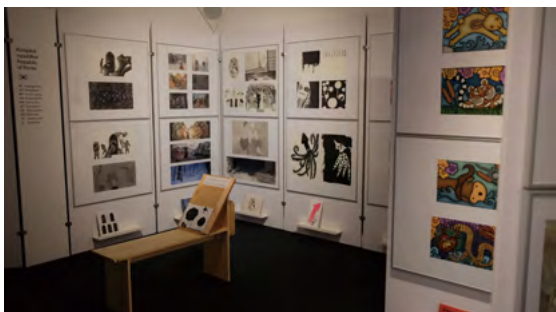
【テキスト：学芸員 庄子真汀】

IO.4



BIBでは、専門家からなる国際審査員が、世界中から集まったイラストレーションを厳正に審査し、「グランプリ」「金のりんご賞」「金牌」を決定します。その結果がはじめて発表されるのが、開会式での国際記者会見。しっかりメモを取り、講評を聞きます。

そして、受賞作をふくむすべての出品作が、展覧会のかたちで一堂に会します。今回の会場は、ブラチスラバの中心に位置するスロバキア国際児童芸術館。部屋中に所狭しと作品が並んでいました。ここではじめて今回のBIBの全容を知ることになるので、圧倒されながらも受賞作や出品作をくまなくチェックします。



IO.5

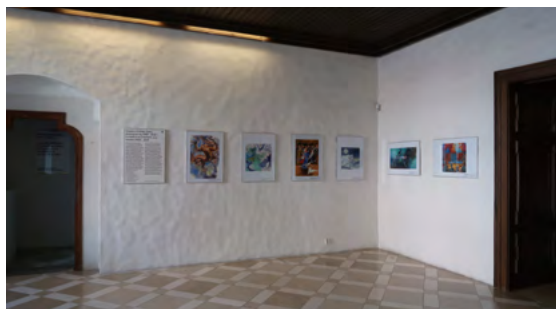
BIBでは、毎回、テーマに沿った国際シンポジウムが開催されます。今回のテーマは「おとぎ話の本」。世界各国の専門家や作家により、さまざまな切り口で発表が行われました。物語の世界においては、どの国も共通点を持っているのだと気づかれます。



また、市内ではBIBの関連展示がいくつも行われています。各国のイラストレーションの共通点を探す展示や、歴代の子どもの審査員賞を紹介する展示など、興味深い内容ばかり。



関連展示「わたしたちをつなぐもの」



関連展示「子ども審査員賞受賞者展 1996-2021」

IO.6



今回の調査では、スロバキアでの美術教育を知るために、ブラチスラバ美術・デザインアカデミーで教鞭をとる画家・イラストレーターのリュボスラウ・バリヨさんを取材。研究室に伺い、学生の作品とともに教育現場の現状を紹介していただきました。

最後にもう一度展覧会の会場へ行き、あらためて作品を鑑賞。国内巡回展において、どのようなテーマでどのような作品を紹介すべきか、案を出したり候補を絞り込んだり、検討を重ねます。国内巡回展は、出品作の全容がわかってはじめて内容を構築していく部分があるので、現地での実見と調査が欠かせません！



会場のスロバキア国際児童芸術館

調査の成果が詰め込まれた「ブラチスラバからやってきた！世界の絵本パレード」、ぜひご覧ください。また、展覧会公式図録にも充実したレポートやインタビューが載っています。こちらもあわせてお楽しみください。

ノックノック！

千葉県美術館を たのしむ 4つの扉



プレワークショップ講師 下司尚実（振付家、演出家、ダンサー）
【写真撮影：大塚歩】

「世界の絵本パレード」展と同時開催で、30周年イヤーの幕開けとなる本展覧会。どのような仕掛けがあるのでしょうか。展示担当チームに聞きました。
【話し手：学芸員 山根佳奈、田口由佳、上田美里】

——タイトルにある「ノックノック」は、扉をノックする音ですか？

そうですね。扉を開いていくための音であり、そこに扉があることに気づいてもらうという意味もあります。ロゴに添えられた絵は、さや堂ホルの鉄の扉

についているライオンのノッカーが元になっています。これは、外から人を迎え入れるための扉で、普段あまり気づかれないけれど、学校来館プログラムの美術館探検隊では、みんな見つけてきますね。ロゴを依頼したデザイナーさんが、美術館の気になるものをいろいろリサーチする中で、「このライオンのノッカーは良い顔をしている!」。言われてみると、なんだか私たちも愛着が湧いてきて…。このロゴには、作品と美術館自体に、ノックして入ってきてもらいたいという気持ちが込められています。

——「扉」は、展示ではどのように登場するのでしょうか。

会場では、作品を、いつもと違う楽しみ方で鑑賞することができるように、問いや投げかけを、扉というかたちで設けていきます。ただ、それを使って作品への扉をノックし、自分の中にある扉をノックするのは、来館者自身に楽しんでもらいたい。そのヒントだけが、いくつも散りばめられた展示にしたいと思っています。

——今回の展示には、ワークショップも組み込まれています。

来館者の皆さんに千葉県美術館のおもしろい扉と一緒に探し、それをノックしてもらえたらと考えました。プレワークショップとして講師にカラダのプロフェッショナルを招き、身体を使って五感を開いて作品を味わうという機会を用意しています。普段は目や頭や心を使って作品を観ることが多いですね。いろんな身体の動きをしてみると、作品の見え方がどう変わるのか。自分の身体にもっと意識を向けた状態で

作品を前にすると、どのような出会いがあるか、展示室の中でじっくりと探っていきたいと思っています。そして、プレワークショップの参加者の体験が、会期中の来館者の体験を誘発していく仕組みもつくる予定です。つくりかけラボのイメージに重なる部分もありますね。会期中はその他、身体だけでなく心にアプローチするプログラムや、対話型鑑賞も実施します。

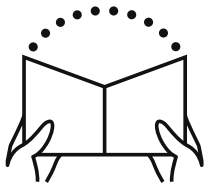
この展覧会が30周年の扉になるように、1年間を通してコレクションを楽しんでいただくためのスペシャルツールもつくりまします。こちらもお楽しみに！

開館30周年記念 ノックノック!千葉県美術館をたのしむ4つの扉

会期 2025年3月22日[土]～5月18日[日]
会場 8・7階 企画展示室
休室日 4月7日[月]、14日[月]、
21日[月]、28日[月]、
5月7日[水]、12日[月]

詳細はホームページよりご覧ください





びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー 本をみる、美術をよむ vol.14
出品作品の絵本を読みましょう！

「ブラチスラバからやってきた!世界の絵本パレード」に出品されている、日本代表作家による原画が載った絵本をご紹介します。原画はもちろん、物語もあわせて楽しめるのが絵本の魅力。ぜひ原画も絵本もどちらもご堪能ください。

あべ弘士『よあけ』 偕成社、2021年刊



ユリー・シュルヴィッツによる同名の絵本をイメージし、作家が近年取材を重ねるシベリアのピキン川を描いた絵本。鮮やかなイラストレーションから、雄大な自然とそこで暮らす生命の息づかいが聞こえてくるようです。

荒井良二『ゆきのげきじょう』 小学館、2022年刊



お父さんのだいじな本を破いてしまった男の子。雪一面の外にスキーで飛び出すと、うっかりくぼみに落ちてしまうのですが、なんとそこには小さな「げきじょう」が。白い雪と、カラフルな劇場のコントラストが美しい冬の物語。

石川えりこ『ほんやねこ』 講談社、2021年刊



ねこは本屋の店主。ある日、窓を開め忘れて出かけると、本の登場人物たちが風に乗って飛ばされてしまいました。ピノキオやシンデレラなど、よく知っている仲間が次々登場。物語の世界がいつそう楽しくなる絵本です。

きくちちき『ともだちのいろ』 小峰書店、2021年刊



くろちゃん、真っ黒な犬。いろいろな色のともだちが、くろちゃんに好きな色を聞いていきます。でも、一番は決められない! 作中に登場する二匹の「くろちゃん」には、実はモデルがいます。答えは展覧会をご覧ください!

齋藤槇『おしりじまん』 福音館書店、2022年刊



「みんな みんな じまんの おしり」。後ろ姿に着目し、19種類の動物の自慢のおしりが描かれています。小さい頃から動物に親しみ、大学では日本画を学んだ作家の、ステンシル技法による繊細な描写が美しく可愛い一冊。

ザ・キャビンカンパニー『がっこうにまにあわない』 あかね書房、2022年刊



大事な日に寝坊をしてしまった主人公は、通学路を駆け抜けます。しかし、大きな水たまり、ぐにやぐにやの歩道橋、いつまでも開かない踏切、どうしよう! はっと世界が開けるような結末を迎える、すがすがしいお話。

junaida『EDNE』 白泉社、2022年刊



ミヒヤエル・エンデ『鏡のなかの鏡—迷宮』のオマージュとして描かれた30篇。見開きで左右対称に配置されたイラストレーションは、まるで合わせ鏡のよう。最初からでも、最後からでも読むことができる美しい絵本です。

たじまゆきひこ『なきむしせいとく 沖縄戦にまきこまれた少年の物語』 童心社、2022年刊



主人公「せいとく」の視点で、1945年の沖縄戦を描いた絵本。作家は、40年以上にわたって沖縄の取材を続けています。現地で聞いた話や手記をもとに完成させた本作は、戦争の残酷さと平和の大切を切実に伝えています。

堀川理万子『海のアトリエ』 偕成社、2021年刊

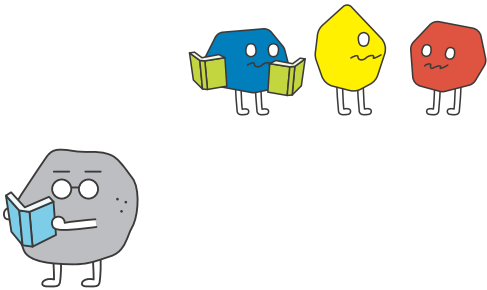


夏、海が見えるアトリエで、絵描きさんと過ごしたあの日々。夜の読書、朝の体操、海辺の散歩。おばあちゃんの小さい頃の思い出が、暖かな語りとみずみずしいイラストレーションによって鮮やかに描かれます。

桃山鈴子『へんしん すがたをかえるイモムシ』 福音館書店、2022年刊



「イモムシ画家」である作家による初の絵本。3種類の蝶が、四季のなかで卵から蝶に成長する姿を美しく描きます。実際にイモムシを飼いながら描かれた写実的なイラストレーションには、点描の技法が使われています。



「びじゅつライブラリー」とは、千葉市美術館4階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、約4,500冊配架しています。ぜひふらっと遊びにきてください!

2025年度 展覧会スケジュール

